

昭和十九年十一月の日記作者達

和田正美*

1 前置き

西暦で表せば千九百四十四年に當る昭和十九年の十一月二十四日に何があつたかと訊かれたら、その頃自覺年齢に達してゐた人でさへ、その多くは途惑ふのではないかと想像されるが、この日は翌二十年の八月までほとんど間斷なく續いた東京大空襲の最初の日であり、従つてこれは（事柄の性質上危険な言ひ方かも知れないが）空襲の研究において記念すべき日と言はなければならぬ。が、かう書いてすぐ私は訂正の必要に迫られる。實を言へば東京は以前にも一度だけ空襲されたことがあつた。それは十七年四月十八日のことで、被害は東京以外の地域にも及んだが、東京に話を絞ると、三百四十六人が死傷し、その内死者は三十九人であつたといふ。

しかしどんなものであらうか。これもこの「初空襲」の犠牲者に對

して失禮な評言であることは免れないが、十七年四月十八日の方は孤立し過ぎてゐて、空襲をその連續性に即して研究しようとする立場からはさほど重要とは思はれない。拙稿では暫定的な措置として十九年十一月二十四日の空襲を東京大空襲の起點に据ゑることにしておく。また、これは前言の訂正とまでは言へないが、幾分それに類したことをして記すと、東京大空襲はいふまでもなく日本全土への空襲の一部であり、東京の場合だけをそこから取出して論ずることに深い意味があるわけではない。十九年十一月二十四日の空襲にこだはつて、同じ十一月の十一日に行はれた九州への空襲を無視することは不當であらう。東京大空襲といふ呼稱自體便宜的であり、十七年四月十八日の空襲の被害が東京に限られてゐなかつたことはすでに述べたが、その被害地域の中には名古屋と神戸すら含まれてゐる。また、東京大空襲といふ際の「大空襲」といふ表現が眞に妥當するのは十九年よりはむしろ二十年の數次の空襲についてであらうかとも考へられる。

とはいへかういふ問題で餘りにも固苦しく振舞ふことは考へ物であると思ふ。曖昧なことはしばらく曖昧なままで話を進めてもよいのではないか。空襲の實相と出來ればその本質を明らかにするためには、杓子定規な態度を執らないことと手近かなところから始めることが肝要であるやうに思ふされる。

以下に試みるのは十九年十一月の空襲とその前後の日々の様相に關する數人の日記作者の記録を調査することであり、簡単に言へばこれは私の東京大空襲研究の一環としてのささやかな素描である。

取上げる日記の作者名と書名（これらの日記はすべて單行本として出版されてゐる）を左に記すと、

永井荷風『斷腸亭日乗』

内田百閒『東京燒盡』

清澤冽『暗黒日記』

大佛次郎『大佛次郎 敗戦日記』

古川緑波『古川ロッパ 昭和日記』

伊藤整『太平洋戦争日記』

ここに名を挙げた人達の職業は永井、内田、大佛、伊藤が作家であり、清澤は外交評論家、古川は喜劇役者である。十九年十一月における彼等の居住地についていへば、鎌倉在住の大佛以外は東京都内に住んでゐたやうである。

2 十一月一日

昭和十九年十一月二十四日の空襲は東京都民にとつて青天の霹靂ではなく、彼等はこのことがあるのを夙に豫測してゐた。サイパン島とテニアン島の失陥はそれぞれ同じ十九年の七月と八月のことであり、この二島を含むマリアナ諸島からすでに米軍機が日本本土に飛來して東京以外の幾つかの地域に爆撃を加へてゐたからである。そして十一月一日には東京地方に久しぶりで空襲警報が発令された。

その時、古川ロッパは有楽町驛近くの文ビルの中にゐたといふ。

正月の企畫の第一回打合せのつもり、滝村も樋口もゐて、話を始めようとしてゐる折柄、ブーウとサイレン、おやK・Kだなと言つてゐるうち空襲警報のサイレン、ドーンとひびく高射砲の音、いけない、それ逃げべしと、地下室へ待避。もとの我一座の事務

所だつたところ、その一隅に腰を下して、ひたすら神に祈る。樋口正美と前川、滝村、そこへ突破が加はつて漫才みたいなこと言つてちびこまつてゐる——一時間餘。空襲警報解除。

私達が日記をつけるのはそこに記される筈のことが過ぎ去つた後だから、如何なる周章狼狽も紙の上では色褪せたものにならざるを得ないが、さういふ事情を考慮に入れても、ロッパの日記のこの日の記事は、遂に來るべきものが來たといふ運命感のやうなものは感じさせない。

そして伊藤整にはその周章狼狽すらなかつたやうに見える。彼は床屋で散髪をしてゐる時に空襲警報を聞いたので外に出て無蓋の防空壕に入つた。

防護團員がそばに來たので、「空襲ですね」と話しかけると、「ええ、しかしみんな道路を歩いてゐますよ」と言ふ。かうしてゐるよりも早く家へ歸らねば、と思つたので、表の甲州街道へ出てみる。表通りには人影はない。あちこちの軒下に、防護團員やら退避してゐる通行人たちが立つてゐる。街を横切る者が時々ゐる。それは舞臺を横切るやうに大急ぎに、敵機をおそれるといふよりは、防護團員に叱られはしまいかと怖れるやうな姿で走つて行く。街道をトラックが、いつもよりもすさまじい速力で走つて行く。それが何臺もつづく。しかし中には悠々と道を横斷して行く者がある。私もそれにならつて、道を横切り驛の方へ行く。

まるで小説の粗筋のやうな文であるが、ここにあるのは、市民社會の中にふと「異常」の一石が投ぜられ、それが波紋を惹き起した程度の光景であらう。市民社會の枠組は未だゆらいではゐないのである。

一方、清澤冽はこの時のことを次のやうに記してゐる。

電車が大森驛に行くと「空襲だから退避しろ」といふ。皆な飛び出て、思ひ思ひのところに隠れる。十分ばかりで解除。再び電車に乗つて品川まで行くとまた「空襲、退避」だ。皆遽^{あは}てて線路を横ぎつて、建物の横などにかくれる。そんなところにあると火事が出たら、まる死にだ。僕は外に出る。非常な混雑だ。十分ばかりで解除になつたが、省線は動かない。仕方がないから市電で東洋經濟に行く。ちやうど、地下室に退避するところであつた。これで空襲があつたら、ほんとに大變だ。形式的な訓練が何にもならぬことが、今日のことと分る^③。

清澤がこのやうに非難してゐる「形式的な訓練」は「建物の横などにかくれる」ことだけでなく、「地下室に退避する」ことも指してゐるのだらうか。さうだとすれば、仲間と一緒に地下室へ逃げたロツパの態度は批判さるべきことになる。

清澤はアメリカ通のジャーナリストであり、反戦論者としての側面を持つが、それと同時に、近代戦には近代的な感覚で臨まなければならないといふ主張をも抱いてゐたやうである。さういふ感覚を缺いた日本の軍官民への苛立ちが『暗黒日記』の隨處に見出だされる。彼にしても空襲を呪ひはしたが、それは大分先のことであつて、十九年十

一月の時點で空襲警報が発令された位では、それは表面化すべくもなかつた。

他の日記作者達は事實を傳へてゐるだけである。

宿醉の為何もしないでゐたら空襲警報が出たので水を掬み刺子のはんでんを着てゐる。實によく晴れ渡つた空で高いところを戦闘機が飛んでゐる。後で聞くと一機か二機B 29が京濱地區に偵察に來たらしい。三時に解除。^④（大佛次郎）

〔警戒警報の警笛に續いて〕高射砲だか何だか大分近くに音がしたので、疊を上げて庭の防空壕に這入らうとすると空襲警報が鳴つた。^⑤（内田百閒）

午後二時頃及夜十時頃警報あり。^⑥（永井荷風）

二十年の三月と四月と五月の東京大空襲がもたらした慘禍を知つてゐる私達はその出發點を十九年十一月二十四日の空襲に求めたくなるし、更にその空襲の出發點を十一月一日の空襲警報に求めたくなるが、後世の私達にはさういふことが出来るとしても、十九年十一月の頃の人々は先のことなど皆目見當がつけられなかつたわけだから、彼等に切迫感が充分にはなかつたことを咎めるのは誤りである。彼等は既述した通り、このことがあるのを以前から豫測してゐた。だから彼等はこの新しい事態に何とか適應しようとなつめたかの如くに見える。

このことに關連させて言つておきたいのだが、この小論で取上げる

数々の日記は世に空襲日記と稱されることがあるけれど、それは結果論であり、作者達は誰にしても最初から空襲の記述を目的にして日記の筆を執つたわけではなかつた。彼等は日々の生活の営みの中で空襲といふ現象に直面したのである。生活があつて、然る後、空襲があつた。空襲の激化は當然、彼等の生活の営みを困難に行つたが、それでも彼等にとつて空襲がすべてであつたと考へることは出来ない。これは空襲研究の盲点であり、半ば自戒の言として書き記しておく。

3 十一月二十四日

空襲警報は一日に續いて五日と七日にも發令されたが爆撃はなかつた。言はずと知れた偵察飛行である。そして二十四日に（前章の終りで問題にした「後世の見方」を敢へて採るとすれば）人々を塗炭の苦しみに陥れることになる東京大空襲の事實上の序幕が開いたのである。この日の空襲の概略は次の通りである。

日本側の調査では約八十機、アメリカ側の資料によれば八十八機のB29が數編隊に分れて東京の上空に侵入した。正午過ぎのことである。アメリカ軍の爆撃の主目標は北多摩郡武蔵野町の中島飛行機工場であり、それによつて武蔵野町の大半は廢墟と化し、中島飛行機工場だけで七十八名が爆死した。更に一部の小編隊は荏原區、品川區、杉並區や東京港などを爆撃した。この空襲による被害は死傷者五五〇名、被害家屋三三二戸、被災者一三二五名であつたといふ。

一夜にして約十万人の人命が失はれたと推定される二十年三月十日の空襲にくらべれば、この數字が表す被害は微々たるものでしかないが、それでも東京のしばらく續いた擬似的な「平和」の眠りを破るには足りたであらう。とはいへこの空襲が人々をパニックに陥れたのでなか

つたことは、私がここまで述べたことから容易に想像されようと思ふ。

永井荷風は、「正午過空襲警報」としか書いてゐない。翌二十五日には、知り得た被害状況を略述してはゐるけれど。

内田百閒は淡々と次のやうに記した。

空襲警報鳴り午後三時まで敵襲續く。一昨年の四月十八日以来の騒ぎなり。（中略）又敵の飛行機は来る事ならん。厄介な話なり。

百閒がこの「厄介な話」に眞に苦しめられ、日記の中にその様相を長々と記さなければならなかつたのは翌二十年に入つてからのことである。

古川ロッパはここでも、慌てふためいた自分の姿を、『これから先どうなるだらう』といった類の感情抜きで思ひ返してゐる。

風呂から出て裸の時、空襲警報となる。あはて、國民服を着る。家の防空壕が水浸しなので、女房と子供二人は、急いで鈴木さんの壕へ入りに行つた。ラヂオをきくと、先づ、敵機は伊豆方面から帝都外郭上空に在りと言ふ。ドン！と高射砲の響、こいつはいかんと、家の壕の水の漬つてゐる際迄下りて腰かけ、鐵兜を被つて、壕の蓋をして、黙々としてゐた。

これらの日記にくらべると大佛次郎のそれは、他人から聞いた話としてではあるが、空襲による被害の状況をその日の内に傳へてゐる點が注目される。

横濱から鎌倉に歸つて來た木原といふ人の話として――

〔神奈川〕縣内所々に爆彈を落してゐるが小規模の感がある。葉山の田舎の百姓やに一彈、一人が死に一人が大腿部に負傷、一番大きいので川崎の三菱石油のガソリン罐蓄積所に焼夷彈。これが火事となつただけで他は云ふべきほどのものはない。^⑩

また東京から歸つて來た岸といふ人の話として――

市中は無事、敵機の狙ひは工場地帯らしく立川中島に相當の被害あつたらしく、他は散發的に大崎大井の工場に爆彈を投下、大崎の日本光學がやられたらし。^⑩

この二つの聞き書にはそれぞれ、「高射砲不發彈の被害も加へ死んだのが六七名と云ふ程度らしい」、「機數に比し爆撃の程度は規模小なるらし」といふ文が続いてゐる。要するに大した空襲ではないといふことだらう。ここには自分達の生存がおびやかされることへの恐怖心もそれを強ひる敵への怒りもない。

もつとも「怒り」といふことなら、それを自國の指導者に向ける態度もあり得ないことはないやうに思はれる。清澤冽は次のやうに書いた。

それにしても學徒は、皆な工場にあり。工場空襲の場合には、これが全滅の危険にあり。壯丁は軍人として、少年は、工場において――ああ。この國はかくて亡國に瀕す。愚劣なる指導者の罪、つひここに至る。^⑪

それならどうすればよかつたのかといふ問ひ掛けに清澤はどんな返事を用意してゐたのだらうか。彼の批評はすこぶる一面的であるやうに見える。しかしこれが彼の愛國心の逆説的な表れであることは認めなければならぬ。

尚、右の文は（少なくとも私が使用してゐる岩波文庫版では）この日の記事の全文であり、おそらくこれは米軍機による中島飛行機工場爆撃のことを知つた上で書いたものであらうが、二十四日の空襲そのものの言及はこの日にもその後の日々にも見出だすことが出来ない。

さてこの日の日記の中で一番讀みごたへがあるのは伊藤整の記事である。

十二時二十分頃京王電車明大前から乗車して、櫻上水近く來ると、空襲警報となり、その驛で下車して附近の無蓋壕に退避した。私は冬のオーバーに、頬蔽ひのついたスキイ帽をかぶり、鐵兜を持つてゐたのでそれを上からかぶつた。「あれだあれだ」と言ふ聲に見上げると、六機編隊で西北吉祥寺邊から、東南品川方面に向つて敵機が飛び、我方の高射砲彈の音がし、上空で炸裂してゐた。高射砲彈が危いと思ひ、私は、女の生徒や、中學生や、勤人らしい男たちとそこに蹲んだ。薄く雲が出てゐる中を、敵機も、我方

の戦闘機も白く雲を吹いて飛んでゐる。我方の飛行機も幾臺か見えたが、敵機のあるあたりで戦つてゐるのが見えない。敵機は大きい故、かなりはつきりと形が見えるが、よほどの高空を飛んでゐるので、その高さまで我方の飛行機は達しないやうにも見えた。¹³⁾

空襲の實景を見るには至らなくても、それに前後する緊迫した東京上空の光景を生きた文で描いた文であり、これだけの文を短時間に書き上げるのはすぐれた記録作者でなければ出来ないことであらう。しかもここではアメリカの空軍力が日本のそれを壓してゐることが暗示的に語られてゐるのである。

そして伊藤はこの後、傳へ聞いた被害状況などを記してから、この日の長い記事の終り近くで次の指摘を行つた。

七十機もの侵入といふことであるが、私は身近に爆弾も焼夷弾も落ちるのに接しなかつたせるか、割にあつた印象しか受けずゐるが、若し今、東京附近の飛行機工場に大きな被害があれば、我方の戦力は目に見えて低下するであらう。それがもつとも憂ふべきことである。(中略) 敵は工場のみを狙ひ、市街の盲爆はしてゐないから、都民のあるものは、まだ本當の空襲の怖ろしさを知らないのだ。¹⁴⁾

この文の前半に現れる、「割にあつたりした印象しか受けずゐる」といふ感想において伊藤は他の日記作者達と似たり寄つたりであるが、後半に見られる、「市街の盲爆」と「本當の空襲の怖ろしさ」を結びつけたことでは、鋭い洞察力を示してゐるやうに思ふされる。約三週

間前の十一月一日の幾分のんびりした書きぶりは消滅し掛けてゐる。彼は早くも十九年の十一月二十四日に、来るべきものが何であるかを漠然とはあれ豫感したのであらうか。その豫感が少なくとも彼の知友の何人かには頷き持たれてゐた、としてもである。

4 十一月二十七日

中二日置いた二十七日の正午頃、日本側によれば四十六機、アメリカ側によれば六十二機のB29によつて再び空襲が行はれ、澁谷區、城東區などに被害が生じた。死傷者は五五〇名、被害家屋は三三二戸、戦災者は一三二五名であつたと傳へられてゐる。

この日の空襲の特徴は、東京地方を蔽ふ厚い雲の上から目標を定めずに爆弾を投下したことである。すなはち伊藤整のいふ盲爆が早くもその實現を見たことになる。この「手法」はアメリカが後年のヴェトナム戦争においてさへ行使しなかつたと言はれてゐるものであり、日本に對してこれが敢行されたことは、日米戦争の本質を明らかにする上で忘れてはならないことのやうに思はれる。

人々は當然のことながら、事態の深刻さに少しづつ氣づいて行つた。内田百閒はあからさまな恐怖感を打明けてゐる。

正午少し過ぎに警戒警報鳴り、外へ出るのを見合はせてゐると一時空襲警報となり、どすん、どすんと云ふ地響きが幾度も聞こえた。今日は非常にこはかつた。家内と二人、運を天にまかして八疊で固くなつてゐた。¹⁵⁾

百聞は知識人らしい、折目正しい文章によつて庶民の哀歡を掬ひ取ることが出来た人である。右の引用文の中の、「今日は非常にこはかつた」といふ短い一節は、この空襲に際會した多くの人々の心情を代辯するものではなかつたかといふ氣がする。

庶民といふなら古川ロッパの日記にも庶民的な特質が感じられる。彼は二十七日に、前章で取上げた二十四日のそれと同じやうな記事を書いた後、それを次のやうに締め括つた。

何となく心落ちつかず、神経衰弱のやうで、いら／＼していけない。かういふ時は、兵隊さんへ、第一線の人々へのたよりを書くに限る。落ちつかぬ心が、しづまつて澄んで来る。⁽¹⁵⁾

かういふ文の蔭で當時の無名の東京都民が息づいてゐるなどと言へば嗤はれるであらうが、彼等の中の（もとよりすべてとは言はないが）多くはこのやうな人々であつたのだと思はれてならない。

永井荷風は、「午後警報あり。二十四日以来毎日の事なり」⁽¹⁶⁾とだけ記した。清澤洸の日記は二十六日から二十九日までの四日間が脱落してゐる。

伊藤整の日記には二十七日の頃がなく、この日の空襲のことは翌二十八日の記事の中で取上げられてゐる。それによると、「昨二十七日は曇つて細雨が降つてゐたので、今日は空襲はあるまいと皆噂してゐた」⁽¹⁷⁾さうであるが、その豫想は見事に外れた。彼は二十四日の場合と

同じく京王電車の櫻上水で退避させられたことを記し、東京に被害があつた場所として澁谷近くの東郷神社、原宿驛前の大きなアパート、江東方面の學校その他、幡谷付近を擧げてゐる。

伊藤は約二十日前の八日の記事の中で、「敵はきつとやつて来るにちがひない」⁽¹⁸⁾「必ず敵は大舉して東京を空襲するであらう」などと書いたが、これは一應のところ、工業地帯への空襲の蓋然性を言つたものである。これはこの二つの引用文にそれぞれ次のやうな文が前後してゐることから知られるであらう。

我方の砲も飛行機も届かぬ高空から東京都を、そしてその周辺にある工業地帯を思ふやうに爆撃することが出来るのだ。⁽¹⁹⁾

敵はサイパン邊の基地の準備さへ出来れば、好む時にやつて来て、日本の工業地帯の好む所を破壊出来るのだ。

それが二十六日に至つて、「一とほり郊外の工場地帯を爆撃してから市内の盲爆を始めるであらうと皆話し合ふ」⁽²⁰⁾と記されてゐることに注意を寄せられる。

大佛次郎の日記は二十四日のそれにくらべるとさすがにずっと切迫したものになつてゐる。彼はこの日の空襲経過を箇條書の形で記してゐるが、その中で引用された「東部軍情報」に「無差別爆撃」の語が見え、「大本營發表」に「盲爆」の語が含まれてゐることは興味深い。そして大佛は次のやうに書いた。

記事にしる寫眞にしるここ暫く天気について明瞭に發表するのを許してない。天気豫報のないのは無論である。しかし今日の如く密雲の上から爆撃されるものなら敵に氣象を隠したとしても同じことのやうである。この種類の戦争の現實に直接關係のない取締り規定が實に多い。⁽²⁰⁾

だからといって敵に氣象を公表するわけには行かないだらうと思ふが、大佛の當局批判は日本の前途を慮るところから發せられてゐるのである。彼は空襲警報が發令された七日には、「帝都上空に二機B29が侵入して偵察して行つたらしい。どうして捕へられぬのか變だし心細いことである」と記してゐる。⁽²¹⁾

ここでひとこと記しておく、私が取上げてゐる六人の日記作者の内、愛國的でないのは荷風ぐらゐるものである。が、荷風といふ人はよく見ると氣質上の厭戰主義者であるに過ぎない。清澤はたしかに反戰的であるが、それは事柄一般としての反戰論であり、現實の戦争行為において日本の敗北を願ふやうな倒錯が彼にあるわけではなかつた。伊藤の愛國的主戰論は戦後の彼の言動からは到底想像することの出来ないほど激しいものである。私達は戦争中の日本人の心理を顧みる時には、充分に心して掛るべきであらう。

5 十一月二十九日・三十日

二十九日の夜半から三十日の未明にかけて、日本側は二十機と見做し、アメリカ側は二十五機と稱するB29が侵入して投弾し、その結果、神田區、芝區、麻布區、日本橋區などで大火災が發生した。死傷者は一五八名、被害家屋は二九五二戸、戦災者は九一二名を數へたとの

ことである。B29の機數が少なかつた割には被害が大きかつたことに注意しなければならない。それはこの空襲が前二回とは違つて夜間の、しかも焼夷弾によるものだつたことに基いてゐる。とはいへ最初の空襲と二度目の空襲もその形態は互に異なつてゐる。奇妙な、いや危険な言ひ方ではあるが、アメリカ軍がこのやうに攻撃方法をその都度變へたことは驚嘆に値すると言はざるを得ない。

ことここに至つてはどれほど吞氣な人でも事態の深刻さに氣づかされたであらう。

深夜の火災は多くの人々に目撃されてゐる。六人の日記作者の内、それを遠方からにもせよ見たことを記してゐないのは鎌倉在住の大佛次郎を除けば清澤冽だけである。彼はかう書いた。

この焼け出されたのに對し、政府は何事もできない。隣組で食料、衣服を取敢へず與へ、後はいはゆる縁者疎開をさせるのださうだ。隣組とても、しかし與へるべきものは、そんなにあるはずはない。そこで被害者は「身の不幸」として「お氣の毒様」だけだ。⁽²²⁾ (三十日)

この一節は富士アイスの重役會で知つた、B29の「盲爆」による「東洋經濟」の後方や「日本橋の三越前方」の被害についての記述と「雨降る。そこから今晩來の火事の煙が出てゐる」といふ文に挟まれてゐるので、清澤が火災そのものは見なかつたにしても被災地の慘狀に接して心を痛めたことは明らかであるが、それにしても彼の心の動きはまだこの時點では政府當局の無爲無能への怒りに傾いてゐると言

へよう。

前二回の空襲ではそつけなかつた永井荷風も今回は空襲の現實に即應してゐる。

砲聲爆音轟然として窓の硝子をゆする。窓より外を見るに東北の空紅色に染りたり。其方角より考ふるに丸の内邊爆撃せられしなるべし。⁽²³⁾ (二十九日)

鄰人の話に神田日本橋邊今朝六時頃まで火歇まざりし由。麻布にては三河臺區役所前の大邸宅盲爆⁽²⁴⁾にて焼亡せり。(三十日。傍點、引用者)

荷風ですら盲爆の語を使ふやうになつたことには興味を唆られる。もつともここには取澄した文章だけがある、その「盲爆」にさらされた人々の苦しみはその中へ這入り込むことが出来ないといふ批判は成立つかも知れない。

その點、内田百閒はこの場合にも彼自身の経験を紙の上に展べることを通して何かを代表してゐるやうに見える。

十二時五分前空襲警報となり、忽ち神田の方の空に大きな火の手上がる。爆彈落下の地響き連續して聞こえ、生きたる心地なし。火の手は南の方へひろがり、憚りの廊下の窓を開けると、雨風に乘つて火事のほひがした。午前三時解除となり、ほつとする間

もなく、四時十五分また警戒警報に續いて空襲警報鳴り、更に爆彈の落下する音聞こえて火の手はなほ右の方、南の空へ延びた。五時十五分解除となる。夜來より終日寒雨やまず。身體がかたくなつた儘、一日ぢゆうほごれない。⁽²⁵⁾ (三十日)

この記事によつて代表されてゐるものは何か。それは當時の人々の無力な受動性でなければならぬであらう。實際、こと空襲に關する限り、受動的に振舞ふこと以外の何が人々に出來たであらうか。「身體がかたくなつた儘、一日ぢゆうほごれない」状態をひたすら忍ばなければならぬ。アメリカの攻撃目標は工業地域に限定されるだらうといふ漠たる期待が人々の間にあつたとしても、それは幻想に過ぎないことが二十七日から二十九日、三十日に掛けての空襲によつて判明したといふものである。

このままで行くと大變なことになるといふ危機意識は伊藤整によつて明確に表現されてゐる。

みな急に恐怖に襲はれたやうに、もうかうなれば東京の半分ぐらゐる焼野原になるのはすぐだ、とか、かうして夜の空襲が十日もつづいたら精神的に皆參つてしまふとか言つてゐる。⁽²⁶⁾ (三十日)

昨夜の空襲で東京都民の生活は、更に一段と深刻に變つた感がある。昨夜の経験から、空襲されたら、ほとんど今の東京の建物では抵抗出來ず、焼かれ殺されるのみだといふことが心に刻み込まれたのだ。⁽²⁷⁾ (三十日)

そしてこの愛國者は一縷の望みをサイパン島の奪回に懸けるのである。

出来るならば、何とかしてサイパンを取戻さねばならない。でないと日本はその銃後の戦力を日一日と消耗して、戦へなくなる危険がある。⁽²⁶⁾ (三十日)

夜空が眞赤になるのを伊藤整と同じく目撃した古川ロッパはそれを含める諸々のことを書きつけた後、日記の記事を次の二節によつて終らせてゐる。

帝都には敵は一機も入れない、鐵壁の陣だと誇つてゐた軍は、何をしてゐるのだ。ラヂオは「帝都上空」といふのに馴れてしまつたではないか。此の惨害を、何うして呉れる。レイテ灣の戦果を感謝する一方、都民は皆、軍を恨んでゐるのに違ひない。⁽²⁷⁾ (三十日)

今朝は新聞も来ず、郵便も来ない。人生にかういふ日を、かう度々迎へるものか。ラヂオは、今曉B29二十機位の編隊、波状攻撃で、帝都上空高々度より盲爆、數ヶ所に火災、と傳へたのみ。一機も落せないのか。かくて東京は何うなる？⁽²⁸⁾ (三十日)

これらの文において注目したいのは、ここに書いてあることが、文體の違いを度外視すれば、そして多少の修正を施さへすれば、伊藤整の日記の中にも、大佛次郎の日記の中にも、清澤洸の日記の中にも

入れられさうなことである。修正の幅をもつと大きくすれば内田百閒の日記の中にだつて入れられるかも知れない。

燃え熾る東京の様子を鎌倉から案じた大佛次郎は、「上空は月明、やる方は面白からうし壯絶だらうが東京の人は雨中をひどい目に遭つてゐるのである」⁽²⁹⁾ (二十九日)と書いたが、これなどはロッパの喜劇的な調子の文の中に置くことも出来るのではないか。

このことを修辭的に言表せば、⁽³⁰⁾ 今や個性が自らを超えつつあるかの如き觀がある。或は個性と個性が交錯し始めたかのやうに見える。

さういふ妙な事態をもたらしたものは爆弾及び焼夷弾といふ非個人的な殺戮兵器である。これにくらべれば戦場で敵を倒すために執る武器の方がずつと個性的であると言つてよい。何故ならそれが使用された時、人は屢々、倒れた敵の苦悶の形相を見ることが出来るし、場合によつてはその敵に人間的な感情を抱くことも出来るからである。それを使はなければならぬ状況で、兵士の判断から、敢へてそれを使はないこともあり得るだらう。しかし爆弾と焼夷弾にはさういふ可能性はとざされてゐる。

そのやうな非個性を極點まで押し進めたのが、日米戦争の末期に日本の或る地域で使用され、今日の國際關係の基本を律してゐる所の核兵器である。

昭和十九年十一月二十四日から三十日に掛けての僅か一週間で東京の生活環境がどれほど變つたかを思はないではゐられない。しかしこれは東京大空襲の序曲に過ぎなかつたのである。この後、翌二十年の八月まで、東京とその周邊の人々は——嚴密に言へば日本國中の人々が——死の季節の中を這ひずりまはらなければならなかつた、と書い

て私は、恰も空襲とそれによる被害をすべてと見做すかの如き自分のこの言ひ方に反撥し、抵抗したくなる。

前出の章である2の中で、生活があつて空襲があつたのでありその逆ではないといふ意味のことを述べたが、實際、人々はB 29による猛爆、盲爆の下にあつても生活をなくしはしなかつた。それは彼等の代表として私が選んだ日記作者の中の多くが空襲といふ悪條件に苦しみながらも或は會社勤めに或は執筆活動に或は公演活動に精一杯の努力を傾けたことからつきりわかる。そして生活があつたことは自由があつたといふことである。さうでなければ日記がつけられはしなかつたであらう。

しかしこの「自由」について考へる時、再び迷路に入りさうになる感を抑へ難い。私は内田百閒の言にからめて、空襲の悪夢に日夜おびえる人々の「無力な受動性」を指摘したが、さういふ状況の下における自由とは何だつたのであらうか。不愉快な、出来れば否定したい考へではあるが、それは冷酷な主人に生殺與奪の權を握られた人々がその主人の眼を盗むことで辛うじて保持し得た自由に過ぎなかつたかも知れないのである。

それでは本來的、根源的な自由を戦後の私達は回復しただらうか、といふ疑問がこの小論を書終へた私の念頭を去來してゐる。

付記①本年度を以て退職される島田良二教授は昭和十九年十一月の空襲を直接にであれ、間接にであれ知つてをられる筈である。よつてこの論文を同教授へのささやかな^{はなむけ}銭にしたいと思ふ。

②この論文は明星大學特別研究費の援助を得て執筆したものである。

昭和十九年十一月の日記作者達

和田 正美

注
基礎資料

『東京大空襲・戦災誌』全五巻 東京空襲を記録する會 昭和四十八年―四十九年の数字等の記述はこれに基いてゐる

引用文献

- a 『荷風全集』 第二十三卷 岩波書店 昭和四十七年十二月五日第二刷
- b 『東京焼蓋』 中央公論社 昭和六十一年二月十五日三版
- c 『暗黒日記』 岩波書店 平成二年七月十六日第一刷
- d 『大佛次郎 敗戦日記』 草思社 平成七年六月八日第七刷
- e 『古川ロッパ昭和日記・戦中篇』 晶文社 平成元年十月十日三版
- f 『太平洋戦争日記』(二) 新潮社 昭和五十八年十二月十五日三刷

- 1 e 六八六―六八七頁
- 2 f 一四七頁
- 3 c 二四〇―二四二頁
- 4 d 六十一頁
- 5 b 十五頁
- 6 a 四九九頁 「夜の警報」は警戒警報である。
- 7 a 五〇三頁
- 8 b 二二―二十一頁
- 9 e 六九九頁
- 10 b 八十四頁
- 11 c 二四六頁
- 12 f 一七〇頁
- 13 f 一七一頁
- 14 b 二二頁
- 15 e 七〇一頁
- 16 a 五〇三頁
- 17 f 一七四頁
- 18 f 一五五頁
- 19 f 一七三頁
- 20 d 八十八頁
- 21 d 七十頁
- 22 c 二四七頁
- 23 a 五〇四頁
- 24 b 二二―二十三頁
- 25 f 一七八頁
- 26 f 一七九頁
- 27 e 七〇三頁
- 28 d 九十三頁